

# 骨董屋への思返——

古書店と骨董屋の多い街に佇んで  
いる。床屋の帰りには店をのぞくと楽しい。  
あらとちぎ、骨董屋で筆を手にとった。  
筆管がやや重く、触った瞬間いゝ字が  
書けそ〜うな感じ——だった。午月だった。  
家に戻り書ソ〜ムと非常に良い。



太筆と細筆の中間の太さで、大きい字も  
小さい字も書ける。いま臨書してつる  
米芾の蜀素帖が、ふまきよく巧く書  
けそうな感じだった。

これで千円とは悪い気がした。あの  
骨董屋は、今書道の文室四室の眼が  
ないのだから。他の品、硯や筆や墨でも  
値段が見当違いなものが多々ある。

書き馴れに一つ水々な良い筆に出遭  
えて骨董屋に感謝したい気になった。



次に散髪に行、た帰、骨董屋に寄、  
た。

あの筆が置ソクあ、た所の腕に小ぶりの  
硯があ、た。五千円の値札が付ソク。

たくさん硯を持、ソクソクのが格別その

硯が欲、か、た訳ではな、い。た、何の骨董

屋に思返、  
バーたか、ただけた。

その硯は決、ソク極上、ではな、いが鋒銚ほうせうが

立ち、乾墨が、良、い。

この硯で磨、た墨、で、あの筆を使、つ、



書いけました。気のせいかもしれませんが書けました。

私はまだぐーい気分になんた。

了

令和五年七月五日

日書展表彰式の日